ハンセン病について

山南中学校　一年　田畑 澪菜

小学校の道徳の時間に、ハンセン病について学習した。四十五分間という短い学習時間だったので、ハンセン病についての詳しい内容は思い出せないが、衝撃の連続の四十五分間だったことは覚えている。私の頭に一番鮮明に残っていることは、ハンセン病の方の写真を見せられ、思わず自分の手で自分の顔を覆ってしまったことである。でも目を背けてはいけないと思い、自分の指と指を少しだけ開いて、その指の隙間から、写真を見た記憶だけは鮮明に覚えている。その他はよく覚えていなかったので、もう一度私なりにハンセン病について振り返ることにした。

ハンセン病は、らい菌による感染症で感染すると、皮膚と末梢神経が侵されてしまう。末梢神経が侵されると、熱さや痛みを感じなくなり、怪我や火傷をしても気づかなくなる。また鼻や目など顔の形状が崩れ、手足が変形してしまうなど、外見にも症状が現れる。その変形した姿に、周りの人は、「悪いことをしたから罰が当たったんだ。」とか「神様からの罰だ！」など何の根拠もない決めつけや噂でハンセン病患者は避けられたり酷い言葉を投げつけられたりしていたそうだ。そしてハンセン病患者と関わると、感染するかもしれないからという噂も広まりハンセン病患者は「長島愛生園」で家族から隔離して生活させられた。「長島愛生園」とはハンセン病患者を隔離させる目的で瀬戸内海の長島に建てられた療養所である。ハンセン病と診断されると医師が警察官と一緒に患者の元に何度もやって来るので、近所に知られてしまう。そして家族も差別の対象にされるため、患者は療養所に行く状況に追い込まれた。その後、残された家族の家は、雪が積もったかのように真っ白になるまで消毒され、その家にも住めなくなる状態に追い込まれたそうだ。家族と会えず離れ離れで生活させられる寂しさ。療養所に入ると、その後一度も故郷に帰ることなく死んでしまった人。本当の名前を変えて生活させられた人。好きな人と結婚できなかった人。子どもを産むことまでも反対された人・・・。　ハンセン病に対する正しい知識が無かったために、差別や偏見で苦しみ続けた人々・・。

私は幼稚園の時、家族と従姉妹と一緒に、四国に旅行した。その帰りに瀬戸大橋から大きくてキラキラと光る瀬戸内海を見て感動したことを覚えている。そして瀬戸内海をバックにみんなで撮った笑顔の写真が飾ってある。私の中の楽しかった思い出の一つだった・・・。長島にある「長島愛生園」のことを知るまでは。キラキラと輝く瀬戸内海に浮かぶ長島に、そんな悲しくて酷い歴史があったなんて、とてもショックだった。ハンセン病のことを知れば知る程、悲しくて、

腹立たしくて、悔しくて。大好きな家族に会えず故郷に帰れず、そこで命を落としてしまった人や辛い生活を強いられた人達の計り知れない悲しさと悔しさを考えると、自然と涙がこぼれ落ちた。

この悲しみや悔しさは、絶対に繰り返してはいけない。このことを学んだ私たちが、この悲しくて悔しくて間違った歴史を止めなければいけない。私は強い使命感に駆られた。

でも私に何が出来るのだろうか。自分の行動を振り返ってみた。真実を確かめる前に決めつけや噂を信じ込んでいないだろうか。インターネットの情報を見て、本当かどうか確かめずに友だちや家族に話していないだろうか。自分が拡散していないだろうか。また困っている人がいたら、声掛けをし手助けすることができているだろうか？自分が困っている立場なら、どんな気持ちになるだろう？相手の事として考えず、自分の事として考えられているだろうか？私自身、反省することが沢山でてきた。

『ハンセン病の歴史は、人間の本質を示している。ハンセン病を知ることで人間の本質に迫ることができる』と長島愛生園の藤田園長は語っていた。ハンセン病に対する差別や偏見、人権侵害の問題は、まだ世界中に存在している。ハンセン病に限らず、正しい知識の無さや、自分には関係が無いといった無関心さが差別や偏見を生んでいる。他人が置かれた状況を自分の事のように思いやり、理解することで少しずつ差別や偏見が減っていっていくのではないだろうか。今までの自分の行動を振り返り、心を改めた。

キラキラ輝く広い海の向こうの人達も、私の周りの人達もみんな、人間が人間らしく、自由に伸び伸びと発言や行動ができる世の中なりますように。そうだ、そんな世の中に変えていくのは、私たちだ！